聖霊降臨後第１３主日（特定１８）　　計算し決断する神の同労者　　２０２２．９．４．

今日の福音書の箇所は、「弟子の条件」という見出しになっています。今日の話は、大勢の群衆が、イエス様の弟子になりたいと、一緒についてきたので、その人たちに警告する話として始まっています。イエス様の弟子になるためには、自分の親族や自分自身の命さえも憎まなければ、弟子にはふさわしくない、という過激な表現です。しかし、この憎むというのは、当時のイスラエルあたりの独特の表現で、「ふたつのものをくらべて、より少なく愛する」という意味であって、別の言葉を使えば「そちらを重視しない」ということです。

弟子になる者には、ちゃんとした覚悟がなければならない、ということが言いたいのだろうと思います。

塔を建てる人の話や、戦争をする王の話で、腰をすえて計算したり、考えたりすることの必要性を語られたのは、それぐらいの覚悟があるかどうか。単なる一時的な感情でついてゆくのではなく、じっくり自分の頭で考え、具体的に計算して、確信を持ってついてゆくのか、と決断を聞いているのでしょう。

「考える」という言葉は、私たちには、受け入れやすい言葉ですが、「計算する」という言葉については、もしかしたら、私たちは悪いイメージを持っているかもしれません。「計算づくで、何かをする」とか「打算的に信仰に入る」とかです。信仰の問題を、計算して決める、というと、自分にとって、損か得か、という計算を想像して、嫌な言葉のように考えてしまうのです。

たとえば、「毎月の給料の中から、一定の献金をして、しかも、たまの日曜日を何時間も教会に束縛される。これに、何のメリットがあるのか。」という計算です。損得を考えるなら、やめておく方が、自分には都合がいいという見方があります。そのような、目先の損得で、先ずつまずくなら、最初からやめておきなさい、ということが言えるでしょう。

しかし、損得ではなく、自分には、それだけの力があるか判断する、という計算もあります。
塔を建てる話になっていますが、土台を築いただけで、完成できなかったら、物笑いの種になるだけだ、ということをイエス様は言われています。大きな計画はしてみたものの、お金が続かず、中途半端で終わってしまった話を例に挙げられたのでしょう。

中東あたりでは、畑の見張りの塔やお城の塔など、あちこちに塔がありますが、造りかけでやめてしまったものも多く、バベルの塔もそのような作りかけの塔にまつわる物語として残ったのでしょう。

現代では、頼めば家など建ててくれるけど、ローンを返せないで、借金地獄になり、結果的に保証人に迷惑をかけることになる、という話は、単なる物笑いの種では終われない、深刻な問題です。

これを、イエス様の弟子になることにあてはめてみると、最初はついて行ったけど、途中で嫌になってやめてしまう、そんな中途半端な思いで弟子になってはいけないことを、計算と言われるのでしょう。

それを補うように、今日の福音書に続く箇所には、「塩気のなくなった塩」の話が出てきます。

『確かに塩は良いものだ。だが、塩も塩気がなくなれば、その塩は何によって味が付けられようか。畑にも肥料にも、役立たず、外に投げ捨てられるだけだ。聞く耳のある者は聞きなさい。』（１４：３４～３５）

生半可な気持ちで従っているのでは、塩気を失った塩のようになってしまう。私たちがイエス様の弟子になる、というのは、それによって、塩としての役目を十分はたせなければならない、ということでしょう。塩によって、物が腐らないように、防腐剤の役割をしたり、人々の生活が、味のあるものになるように、という気構えとか使命感を弟子たちは持ちなさい、と言われているのでしょう。

私は、以前面白い映画を観たことがあります。「エバン・オールマイティ」です。テレビの人気キャスターから、アメリカの下院議員になったエバンに、神様が現れて、「９月２２日に洪水が起こるから、それまでに、ノアの箱舟と同じ、箱舟を造れ」と命じるのです。初めて議員に選ばれて、人々からの評判を気にしているエバンに、神様がとんでもない命令をします。

この議員は神様からの命令には従わず、国会議員として働こうとするのですが、自分の周りに次々と動物が近寄ってくる不思議な出来事で、彼は観念して、神様の言うとおりに箱舟を造り始めます。その結果、エバンは周囲の笑い者になり、家族にも見捨てられる、ということになります。

彼の家族は、本来信仰心がつよく、子どもたちも母親と一緒に、いろいろお祈りする家庭です。妻は、家族が一致して、仲よく生活することを望んでいるのですが、奇想天外なことを行おうとする夫には、ついてゆけず、三人の息子たちと家を飛び出します。

しかし、妻が子どもたちと実家に帰ろうとして、途中、あるレストランに寄ると、今度はウェイターの姿で神様が彼女に現れて、とても面白い話をしてくれます。

「あなたが、神様に忍耐を与えてください、と祈ったら、神様は忍耐を与えてくれるかな。それとも、忍耐を得るチャンスを与えてくれるのかな？　あなたが、神様に勇気を与えてください、と祈ったら、神様は勇気を与えてくれるのかな。それとも勇気を得るチャンスを与えてくれるのかな？　あなたが、神様に家族の一致を与えてください、と祈ったら、神様は家族の一致を与えてくれるのかな。それとも家族の一致を得るチャンスを与えてくれるのかな？」と語りかけます。

すると妻は、夫と一緒に働くことを決心します。そして、家族もなりふりかまわず箱舟造りに没頭します。神様はタナボタ式に、いいものを与えてくださるわけではありません。今の自分から一歩進むためのチャンスを与え、決断を迫る方だ、とこの映画の製作者は言いたいのでしょう。

この映画はコメディですので、この後、箱舟が完成すると、その途端に上流のダムが決壊して、箱舟が彼の家族や動物たち、そして見守っている大勢の報道関係者や近所の人々を救うという話になって、楽しい終わり方です。そして、最後に、神様と主人公が会話するのですが、神様は、議員が神様の命令を良く守って仕事をしてくれたと、ねぎらいの言葉を言いました。

今日の聖書の個所で大切なことは、自分の持ち物を捨ててでも、神様の与える使命に従う決心をしなさい、ということでしょう。いろいろ私たちの生活には、困難なことが起こりますが、悩みながらも、腰をすえて、自分が本当に最後までやり通す覚悟ができているか、自分で決断することだと今日の福音書は語っているように思います。

もうひとつ、映画の話で恐縮ですが、宗像に居た時、カトリックの修道士さんから、出エジプトの英雄モーセの物語を描いた「エクソダス　神と王」という映画を紹介されました。私たちは、今から６６年前に作られた、チャールトン・ヘストンやユル・ブリンナーが登場する「十戒」の映画の印象が強いでしょう。モーセが杖を持って、海に向かってそれを掲げると、海が分かれる場面が印象に残ります。神様の力が、不可能を可能にする、ということが強調されていました。

ところが、８年前にできた「エクソダス　神と王」の方は、モーセが軍人だった時や、そのあと羊飼いをしながら、自分の経験から、海の浅瀬を渡れる場所を事前に調べておくのです。そして、神様の命令に従うために、自分の知識や経験を使って、人々に海を渡らせるのです。浅瀬をジャボジャボ歩いている姿は、６６年前の「十戒」の映画とはだいぶ違います。

それはちょうど、現代に箱舟をつくる映画の中で、主人公の妻に、「あなたが、神様に忍耐を与えてください、と祈ったら、神様は忍耐を与えてくれるかな。それとも、忍耐を得るチャンスを与えてくれるのかな？　あなたが、神様に勇気を与えてください、と祈ったら、神様は勇気を与えてくれるのかな。それとも勇気を得るチャンスを与えてくれるのかな？」と言ったことと関連があるように思います。

神様はおひとりで働かれるわけではありません。私たちが主体的に呼びかけに答えて、従って行く決断を迫っておられる、ということでしょう。エクソダスで登場するモーセも、自分の能力を発揮して神様に応えていった。その覚悟をイエス様も弟子たちの条件として語っておられるように思います。

私たちは、信仰をあたかも、すべて神様に任せることのように考えやすいのですが、神様は私たちの主体的な応答、神様と共に働く者だということを覚えておきましょう。

口語訳聖書では、『わたしたちは神の同労者である。あなたがたは神の畑であり、神の建物である。』（Ｉコリント３：９）新共同訳では、『わたしたちは神のために力を合わせて働く者であり、あなたがたは神の畑、神の建物なのです。』